

『正法眼藏聞書抄』における『眼藏』理解について

——本覚法門への批判点をめぐって——その俗諦常住の理解度について——

(Ⅲ)『盧談』20「二諦義」における俗諦常住の考察——(三)

山 内 舜 雄

一、次ニ至^ハハ巧安止観ノ文ニ。粗前ニ立申畢ス。重テ不^レ可^レ費^レス言^フ。無明癡惑本是法性ナリ。以^テ癡迷^ニ故法性變^{シテ}作^ルニ無明^ノ等者。是^レ顯^ニ無明法性^ノ不思議^ノ也。取^テ癡迷^ノ一邊^ニ成^ニス^トハ圓^ノ俗諦^ヲ不^レ可^レ云。六祖大師。初惣安ノ中ニハ只是止観ナリ。於^レ中ニ先重^テ

明^ニシテ法體^ヲ以^テ爲^ス所安^ト。法體^ト者何^ゾ。即妙境也矣所以^ニ無明癡惑本是法性等者。無明法^ニハ法性^ニ生^シ一切法^ヲ矣云^カ如^シ。即是不思議^ノ迷悟也。全^ク非^ニ云^ハ凡情妄見^ニ。爰以^テ六祖大師^ハ。初法ノ文中^ニ。但指^ニス^ニ無明^一即是法性ナリ。但觀^ニ法性^一不^レ觀^ニ無明^一ヲ矣本末ノ釋義尤^モ深妙ナル者歟。今當體諸顛倒等ノ文具^ヲ前^ニ料簡^シ申^シ畢^ス。起是法性起滅是法性滅者前唐院大師。寂故法界俱寂。照故法界同散。散^レ不^レ妨^レ寂。寂^レ不^レ妨^レ散。如來內證。其義如是矣起滅俱^ニ法界也。寂照有^レ所^ニ何^ゾ隔^ル。俗諦常住ノ義在^レ文分明^{ナル}者歟。(一)

次に、巧安止観の文に至っては、粗前に立申し畢んぬ。重ねて言を費す可からず。「無明癡惑本是法性なり。癡迷を以ての故に、法性変じて無明と作る」(天止三、三三七)等と

は、是れ無明法性の不思議を頭わすなり。癡迷の一边を取って、円の俗諦を成ずとは云うべからず。

これは『摩訶止観』の「無明癡惑」から「法性変作無明」までの文を引いて、これを無明法性の不思議とはなしたものの。明らかに円教の二諦からの解釈で、従って癡迷の一边だけを取って、円の俗諦としてはならない、と断っている。

六祖大師、初に惣じて安の中には、只是れ止観なり。中に於て先づ重ねて法體を明かして、以て所安と爲す。法體とは何んぞ、即ち妙境なり。所以に「無明癡惑本是法性」等とは、不思議境の一念三千を指す。三千の妙境、円の世俗諦なり。生滅不常の法に非ずと云う事、重重に立申し畢んぬ。「以癡迷故法性變作無明」とは、「無明、法性に法^止つて、一切法を生ず」と云うが如し。即ち是れ不思議の迷悟なり。全く凡情の妄見を云うには非ず。

ここを以て六祖大師、「初に法の文の中に但だ無明を指すに、即ち是れ法性なり。但だ法性を観じて、無明を觀ぜず。」（天止三、三三七）本末の釈義、尤も深妙なるものか。「今當體諸顛倒」（天止三、三四〇）等の文、具さに前に料簡し申し畢んぬ。起是法性起、滅是法性滅とは、前唐院の大師、「寂の故に法界俱寂、照の故に法界同散。散は寂を妨げず、寂は散を妨げず。如來の内証、その義是の如し。」（大正藏六一、十五上）

起滅俱に法界なり。寂照なんの隔つるところかあらん。俗諦常住の義、文に在り、分明なるものか。

如上の「起是法性起、滅是法性滅」を、寂の故に法界俱寂、照の故に法界同散、そして散は寂を妨げず、寂は散を妨げず、となして遂に、起滅俱に法界に帰せしめる論理コースは、それが円の俗諦常住を云わんとする義は、しばらく措く。『聞書抄』の解説に馴れ親しんだ筆者の眼には、他人事ではあり得ない。『聞書』や『抄』で取り扱う程度の論理操作は、すでに本覚法門において慣熟の域に達しているのを改めて識らされるのである。と同時に、ついには理常住の一元論的性格の徹底化が、いかに本覚法門において強烈なのかを、改めて識らされるのである。

起滅。為_レ當_ハ只除_ク妄謂_ヲ猶存_ニ起滅_ヲ。為_レ體_ニ妄謂_ヲ令_ニ無_ニ起滅_上。答。此亦無_レ別須_レ善_ニ其意_ヲ。若單論_ハ理_ヲ非_レ起非_レ性_上。若約_ニ果德_ニ則性_ハ不_レ妨_セ起_上。若約_ニ衆生_ニ唯起_ニ迷性_上。若聖賢_ハ凡_レ即_レ起_ニ只是性_上。無起性_ニ名_ニ假名_ニ起性_上。今從_ニ反_ニ迷歸_ニ悟_上。以說_ニ今_ニ離_ニ起歸_ニ性見_ニ非_ニ起性_上。仍恐_ニ迷者離_ニ起求_ニ性_上。故令_ニ體_ニ起_ニ其實_ニ不_レ起_上。起既不_レ起。滅亦無滅矣。解釋_ハ起盡_ニ盡義盡_上。不_レ可_レ加_ニ私料簡_上。問_ニ中_ニ除_ニ妄謂_上畢_上猶為_レ存_ニ起滅_ニ體_ニ妄_ニ已_ニ為_ニ令_ニ無_ニ起滅_上。兩樣問難_上答_上時。此亦無別_ニ者_上。猶存_ニ起滅_上云。令_ニ無_ニ起滅_上云。兩重_上不_レ相_ニ妨礙_上。心_ニ成_ニ為_ニ此亦無別_上云也。心起滅_上云_ニ不_レ起滅_上云_ニ其義_ニ不_レ隔_上也。次下_ニ重重_ニ意_ニ以_ニ此義_ニ可_ニ知_ニ之_上也。但_ニ實_ニ向_ニ一_ニ法性_ニ云_ニ之_上。非_ニ性_ニ非_ニ起_ニ非_ニ虛空_{明_ニ非_レ闇_上如_ニ就_ニ至_ニ此理_ニ云_ニ之_上。即_ニ無_ニ起_ニ論_ニ起_上也。虛空_上無_ニ明闇_上故。還而如_ニ不_レ妨_ニ明闇_上。衆生_ハ但_ニ見_ニ起滅_上。唯起迷情_上者是也。譬_ハ但_ニ見_ニ明闇_上如_ニ心_ニ忘_ニタル_上虛空_上。若聖賢_ハ凡_レ即_ニ起_ニ只是性_上。凡_レ夫_ハ起滅_上起_ニ當體_上即是_ニ凡_ニ知見_上前_ニ不_レ起滅_上體_上故也。惣而結_ニ之_上時。起既不_レ起滅亦無_レ滅矣是_ニ起_上體實_上不_レ起也。滅體實滅也。起是法性起滅是法性滅_上云_ニ心正_上在_ニ此_上。俗諦常住_上義。文言甚_ニ丁寧_上歟_上是十三會第十二難}

次に六祖の問答に至っては、問う、安心の中に體は其れ実に起滅せず、妄りに起滅を謂うと云う。当只妄謂を除いて、なお起滅を存すとや為さん。妄謂を体して、起滅をなさしめんとやなせん。答う、此れまた別なし、須らく其の意を善くすべし。若し單に理を論ずれば、起に非ず性に非ず。若し果徳に約せば、則ち性は起を妨げず。若し衆生に約せば、唯だ

次至_ニ六祖_上問答_上。問_ニ安心_{中_ニ云_ニ體其實_ニ不_レ起滅_上妄謂_{中_ニモツト}}

迷性を起す。若し聖、凡を鑒みれば、起に即して只是れ性。起性の名なし、假りに起性と名く。今、迷を反して悟に帰してより、以て説いて起を離れて性に帰し、起性に非らざるを見せしむ。仍つて迷者は起を離れて性を求めることを恐る。故に起を体せしめるに、其れ実に起らず。起既に起らず、滅また滅なし。

解釈の起尽、文尽き義尽せり。私の料簡を加うべからず。問の中に、妄謂を除き畢つて、なお起滅を存すとやなさん。妄を体して已つて起滅なからしめんとやなさん。両様に問難せるを答うる時。「此亦無別」とは、なお起滅を存すと云い、起滅なからしめんと云う。両重を相い妨礙せざる心を成ぜんが為に、「此亦無別」と云うなり。心は起滅と云い、不起滅と云える其の義隔てざるなり。

次に、下に重重の意、此の義を以て、これを知るべし。但し実に一法性に向つて、これを云えば、性に非ず起に非ず、虚空は明に非ず、闇に非ざるが如し。此の理に至れる人に就て、これを云わば、無起に即して起を論ず。虚空の明闇なきが故に、還つて明闇を妨げざるが如し。衆生は但し起滅を見る。唯起迷情とは是なり。譬えば、但し明闇を見て虚空を忘れたるが如し。「若聖鑒凡即起只是性」とは、凡夫の起滅を起す当体、即ち是れ聖の知見の前には不起滅の体なるが故なり。総じてこれを結する時、起既不_レ起、滅亦無_レ滅、是れは

起の体、実に不起なり。滅の体、実に無滅なり。「起是法性起、滅是法性滅」と云える心、正しく此に在り。俗諦常住の義、文言甚だ丁寧なる歟。是十三卷第二離を会す

要は、起是法性起、滅是法性滅を以て、俗諦常住を釈するわけであるが、総してこれを結すれば、凡夫の起滅を起す当体も、仏知見の前には不起の体に外ならぬから、起はずで不起、滅また無滅とはなり、ここに円意からの俗諦常住がまことに丁寧に明かされるに至る。

そして如上の円意からの法性の起滅の釈を前提とする時、『正法眼藏』は「法性」の巻における「法性に開華葉落あるべからずと思惟せらるる思惟、これ法性なり。」を、いかに本覚法門と識別して注するか。『抄』の撰者の頭の痛いところで、それは「法性ナラヌ回避ノ余地ナキユヘニ」と注されている。両者を比擬しただけで一箇の論攷が出来よう。

一 至_二眞無生滅_一俗有_二生滅_一文_二。本書_二。若寂滅眞如有_二何ノ次位_一カ。初地即二地。地_レ從_レ如生。如_レ無有_レ生。或_レ從_レ如滅。如_レ無有_レ滅。滅矣是_二因縁法_一十乘ノ中ノ知次位ノ章也。即_レ爲_レ顯_二圓ノ次位_一立_レ疑_二文也。如_レ本雖_レ無_レ生依_レ如_二論_一生_二。即無_レ生也。如_レ本無_レ有_レ滅。依_レ無滅_二顯_一滅_二也。六祖大師釋_二之。眞_レ無_レ生滅_一。俗有_二生滅_一。眞俗不二、生滅不二矣。是即無生滅_二中_一論_二生滅_一。約_二之_一且_レ雖_レ辨_二眞俗_一還_レ而_二成_二眞俗不二_一義_二也。所謂無生_二生_一ナルカ故_二生不可得也。無滅_二滅_一ナルカ故_二滅不可得也。爰_二眞俗不二生滅義_一一釋_二也。今ノ疑_二釋_一トシテ。不生

不生不可説^{ナレトモ}。有^二因縁^一故^ニ亦可^レ得^レ説^ク。十因縁法爲^レ生作^{ナル}因^ト。如^レ畫^ニ虛空^ニ方便^{シテ}種^カ樹^ヲ。説^二一切ノ位^一ヲ耳矣所謂無生ノ生者。如^レ畫^ニ虛空^ニ一種^カ虛空^上。虛空ノ畫ナルカ故^ニ無^レ始^モ無^レ終^モ。虛空ノ樹ナルカ故^ニ無^レ生^モ無^レ滅^モ。俗諦常住ノ義ヲ自成^ケ也。如^レ此^ノ得^レ意^ヲ。眞無生滅俗有生滅者。欲^レ顯^ニ生滅無生滅體^一是一ナルコト也。若^ク如^ニナラハ難勢^一。寂滅眞如^ハ但^シ常住不滅^ニ住^ニスル圓ノ諸位^一邊^ニ皆^ナ生滅無常^ト可^レ云^ク歟。若^ク爾者圓教ノ次位還而三藏ノ生滅^ニ同^シ。寧圓頓ノ妙位^ヲ耶^ハ。會^{是十四}第九難^一。

「眞無生滅俗有生滅」（眞に生滅なし、俗に生滅あり。）（天止五、一九二）の文に至つては、本書に、「若し寂滅眞如、何の次位か有らむ。初地即ち二地なり。地は如より生ず、如は生あるなし。或は如より滅ず、如は滅あることなし。」（同、一九一―二）是れは因縁法の十乗の中の知次位の章なり。即ち円の次位を顕わさんが爲め、疑を立てる文なり。如は本と生なしと云えども、如に依つて生を論ず。即ち無生の生なり。如は本滅あることなし。無滅に依つて滅を顕わすなり。

六祖大師、これを釈として、「眞は生滅なし、俗に生滅あり。眞俗不二、生滅不二」（同、一九二）。是れ即ち無生滅の中に生滅を論ず。これに約して且らく眞俗を辨ずと云えども、還つて眞俗不二の義を成するなり。いわゆる無生の生なるが故に、生不可得なり。無滅の滅なるが故に、滅もまた不可得なり。ここを以て眞俗不二・生滅義一と釈するなり。今の疑を釈すとして、不生不生不可説なれども、因縁あるが故

に、また説くことを得べしと。十因縁の法、生の爲めに因と作る。虛空に畫き、方便して樹を種うるが如く、一切の位を説くのみ。いわゆる無生の生とは、虛空に畫き、虛空に種うるが如し。虛空の畫なるが故に、始もなく終も無し。虛空の樹なるが故に、生も無く滅も無し。俗諦常住の義おのずから成るなり。此の如く意得れば、「眞無生滅、俗有生滅」とは、生滅無生滅、体是れ一なることを顕わさんと欲す。若し難勢の如くならば、寂滅眞如は但し常住不滅にして、円の諸位に住する辺は、皆な生滅無常と云うべきか。若し爾らば、円教の次位は還た三藏の生滅に同じ。寧んぞ円頓の妙位ならんや。是十四第九難を会す

円の諸位とは、次に円教の次位とあるを指す。そこで生滅無常を主張するのであれば、それは三藏教における実生実滅をいうに同じ。円頓の妙位ということは出来ぬ、というのが結である。それにしても、眞無生滅・俗有生滅の文において、円の次位を論じ、これを無生の生から眞俗不二、生滅不二へと繋ぎ、ついに生滅無生滅の体これ一なるを云う。それにしても無生の生とは、虛空に畫き、虛空に種うるが如し。虛空の畫なるが故に、無始無終。虛空の樹なるが故に無生無滅、これをこそ俗諦常住の自成というのであれば、それは『聞書』や『抄』のいうところと、表註上どれほどの逕庭があるのか、筆者は知らない。後者の道取道得なるを除けば、

く。今此の一段の文は、次第の三止三觀を開して、不次第の止觀を成ずる文なり。ここを以て六祖の大師、何但（同前）と云う下は、惣じて開顯を明かす。前の諸の名を開するに、同じく一実相なり。此れ即ち況を挙げて惣じて標す。何んぞ但し此の圓の三一相即せるのみ。前の一切の次第の中の名を惣じて、同じく開して実に入る。其の相というよりは、次に開の相を示す。初には顯體の中の次第の三止三觀を開して、同じく絶待一妙の止觀を成ず。本書の一段の文は、次第の三止三觀を開して、絶待の一妙の止觀を成ずと云う事、六祖の消釈誠に以て分明なり。次に本書の文に、一切の諸の假悉く皆な是れ空なり、空は即ち実相なりと體るを、入空觀と名づく。此の空を達する時、觀、中道に冥（かな）う。能く世間の生滅の法相を知って、実の如く而も見るを、入假觀と名づく。此の如く空惠は即ち是れ中道なり。二なく別なきを、中道觀と名づく。
（同前）

初に悉皆是空とは、次第觀の空なり。空即実相とは、絶待の空を顯す。達此空時觀冥中道とは、能契の実相を顯わす。能知世間生滅法相とは、所開の次第の假を顯わす。六祖の大師、前の一切の次第の中の名を惣じて、同じく開して実に入ると云い、初には顯體の中の次第の三止三觀を開して、同じく絶待の一妙の止觀と成す。と釈するは即ち此の心なり。若爾者能知世間生滅法相と云える、所開を成んが為に、別教

の次第の假を標するなり。寧んぞ此の文を以て、圓の俗諦生滅すと云う可けんや。上の文に次第の三觀を釈として、「故に經に言く、心若し定に在ては能く世間生滅法相。」（天止二、一九八）是れは雙照二諦の義を釈するなり。六祖大師、此の文を釈として、「生即是俗。滅即是眞。故住中道。」能知三生滅（同前）別教の俗諦を以て、生滅と名づくる事、本末の釈義分明なり。故に此の生滅の俗諦を會して、觀冥中道能知世間生滅法相と云う。能開の心は、生滅即不生滅の理なり。還って是れ俗諦常住の証拠たるべし。

要は、「若爾者能知世間生滅法相」と云うを、所開を成せんが為に別教の次第の假を標するとなさば、別教の俗諦を云うに外ならず、圓の俗諦生滅を云うことはならない。この生滅の俗諦を會せんが為に、「觀冥中道能知生滅法相」の文があるのであり、能開の心は生滅即不生滅の理に外ならない。還ってこれこそ圓の俗諦常住の証拠とはなるべきものである。

一 至（大）淨名疏本末ノ釋ニ。觀衆生品ノ中ニ文殊淨名有二重重ノ問答ニ中ニ。約（本）淨名四無量心ヲ成ストシテ有ニ六番ノ問答ニ見テリ。經文ニ。又問。云何行ニ於正念。答曰。當行ニ不生不滅ニ矣是第五番問答也。又問。何法不レ生何法不レ滅。答曰。不善不レ生善法不レ滅矣是第六番問答也。今此兩番ノ問答同ク捨無量心也。俱屬（大）第四ノ誓願ニ也。大師釋ニシテ此文ニ。初問何法不レ生何法不

滅。正請^レ分^ニ別不生滅相^一。

次答不善不生即是二正勤。遮二遍惡法^一不^レ生善法不^レ滅是智德成
○但不生不滅有二種^一。一世諦二眞諦。此是世諦不生不滅矣
經第五番問答中當行不生不滅者。捨無量心^一故不生不滅云
也。何法不生何法不滅者。正^レ不生不滅義^レ問起^ル也。答^ルニ
之^一。不善不生善法不滅者。出^ス不生不滅體相^一也。解釋釋^ニ
此文^一。不善不生即是二正勤者遮^ニ已生未生惡法^一故不善不
生云也。善法不滅即是二正勤者。已生未生二種善根^一集^ル故
善法不滅云。惡法不生斷德義約。善法不滅智德義成^ル故
也。但不生不滅有二種。一世諦二眞諦。此是世諦不生滅者眞諦
不生不滅者。直眞如法性^一不生不滅義論^ス也。今所^レ云不生
不滅者。是約^ニ智德斷德^一故世諦^一不生不滅云也。眞諦^一不生不
滅外別^ニ可^レ有世諦^一不生不滅云事。以^ニ此文^一可^レ為^ニ明證^一
也。六祖大師。世諦不生不滅者。以^ニ對^ニ顯中二諦^一即是善惡二境。
世諦即是眞諦中之不生不滅耳矣。以^ニ世諦^一中不生不滅其體
實^ニ可^レ一^一故。若如^レ此不^レ得^レ意。妙樂消釋忽^ニ可^レ背^ニ本
書^一也。所以^ニ本書^一不生不滅有二種^一標^{シテ}。一世諦二眞諦^一分別^シ
畢^ス。爾^レ後。此是世諦不生不滅矣此文偏眞諦^一不生不滅^一大
師何分^ニ別眞諦^一不生不滅^一畢^ス。此是世諦不生不滅^一可^レ釋^ニ耶本
末相^一得^レ意。其意自分明^{ナル}歟^ニ會^ニ第十一難^一。

淨名疏本末の釋に至つては、「觀衆生品」の中に、文殊・
淨名、重重の問答ある中に、四弘に約し、四無量心を成ずと
して、六番の問答ありと見たり。經文に、「また問う。云何
んが正念を行ずるや。答う、當^{まさ}に不生不滅を行ずべし。」
(大正藏十四、五四七下) 是れは第五番の問答なり。「また問

『正法眼藏聞書抄』における『眼藏』理解について(山内)

う、何れの法か不生なる、何れの法か不滅なる。答えて曰
く、不善生ぜず、善法滅ぜず。」(同前) 是れは第六番の問答
なり。今此の兩番の問答、同じく捨無量心なり。俱に第四の
誓願に属するなり。大師、此の文を釈として、「初問、何法
不生、何法不滅。正しく不生滅相を分別するを請う。次答、
不善不生、即是二正勤、二辺の惡法を遮して生ぜず。善法不
滅即是二正勤、二善法を集めて滅ぜず。惡法生ぜざれば、是
れ隨德成ず。善法滅せざれば是れ智德成ず。○但し不生不滅
に二種あり。一には世諦、二には眞諦なり。此れは是れ世諦
不生不滅なり。」

經の第五番の問答中に、當行不生不滅とは、捨無量心の不
生不滅と云う。何法不生何法不滅とは、正しく不生不滅の義
を問起するなり。これに答するに、不善不生善法不滅とは、
不生不滅の体相を出す。解釋は、此の文を釋として、不善不
生即是二正勤とは、已生未生の惡法を遮するが故に、不善不
生と云うなり。善法不滅即是二正勤とは、已生未生の二種の
善根の集るが故に、善法不滅と云う。惡法不生は斷德の義に
約し、善法不滅は智德の義を成ずるなり。「但不生不滅有二
種。一世諦二眞諦。此是世諦不生滅」とは、眞諦の不生不滅
とは、直に眞如法性の不生不滅の義を論ずるなり。今、云う
ところの不生不滅とは、是れ智德斷德に約するが故に、世諦
の不生不滅と云うなり。眞諦の不生不滅の外に別に世諦の不

生不滅あるべしと云う事、此の文を以て、明証と為すべきなり。

六祖大師、「世諦不生不滅とは、顯中二諦に対するを以て、

即ち是れ善惡の二境なり。世諦即ち是れ眞諦の中の不生不滅

なるのみ。」とは、世諦の中の不生不滅を以て、還つて眞諦

の不生不滅を成ずるなり。究竟してこれを言わば、二種の不生

不滅その体、実に一なるべきが故に。若し此の如く意得ざ

れば、妙案の消釈たちまちに本書に背くべし。所以に、本書

に不生不滅に二種有りと標して、一世諦二眞諦と分別し畢ん

ぬ。爾して後に、此れは是れ世諦不生不滅と。此の文ひとえ

に眞諦の不生不滅ならば、大師、何んぞ眞諦の不生不滅を分

別し畢つて、此れは是れ世諦の不生不滅と積すべきや。本末

相合いて意得ば、其の意おのずから分明なるか。是十六難を会す

要は、不生不滅に二種ありとし、世諦、眞諦を出し、世諦

不生滅を云うは、これ眞諦の不生不滅の外に、別に世諦の不

生不滅を云うに外ならず、このような世諦の中の不生不滅を

以て、還つて眞諦の不生不滅を成ずるところに、円の俗諦常

住があるとなす。

それにしても、究竟してこれを言わば、二種の不生不滅の

其の体一なる理に帰結せしめられるのは、殊に経豪の『抄』

注に共通するを思わせ、注意を要する。内容の同致を云うの

ではない。注解方法の似同は否定すべくもない。

一次至三、唐決ノ文。廣修決云。（正續一七八四丁年）第六問圓教ノ二諦。但點「法性」為「眞諦」、無明十二因縁為「俗諦」。疑者ノ云。此ノ十二因縁、為「生滅」（ス）、為「不生滅」（セ）。若シ生滅者。何故名「圓」十二因縁ト。答。圓教ノ法性は眞。無明十二因縁は俗。共明ニ圓教眞俗ノ體圓。無ニ復差別。且無明十二因縁俗トイヘ。即シテ俗ニ眞ナ。即レ眞而俗ナリ。故以下、眞諦ノ不レス異ニ「一ノ法」ニ。皆不生不滅上。故ニ而亦能生能滅。以「能生滅」故。故名ニ於圓ト。文云三不可思議ト正斯ノ義也。若シ生定是生、滅定是滅ナラヘ者。小乘法耳。今大乘ノ不思議トイヘ。即レシ生ニ能滅。即レ滅能生ス。生滅隨レ機不定一ヲ。故不レ同ニ聲聞之ニ諦也矣唐決始終其心深妙歟。圓教ノ俗諦者無生滅即生滅也故ニ生定非生。滅定非非滅。

是ヲ稱「不生滅」二諦也。俗諦「不生滅」義其心誠ニ分明也。（俗稱三ノ義）

前唐院ノ大師。雖似生似滅不實生實滅者。生不可滅滅不可生ト云ル。兩師ノ釋義誠ニ隔「海」心一ナル者歟。維獨ノ決文言雖二者略一、大旨無レ所背歟。（是十七會第十五難）

次に、唐決の文に云つては、廣修の決に云く、第六問、圓教の二諦というは、但し、法性を點じて眞諦と為す。無明十二因縁を俗諦と為す。疑者の云く、此の十二因縁は、生滅すとや為さん、生滅せざるとや為さん。若し生滅せば、何が故に円の十二因縁と名づくる。答う、圓教の法性は、是れ眞なり。無明十二因縁は是れ俗なり。共に圓教の眞俗を明かす。体円にして、復た差別なし。且く無明十二因縁の俗というは、俗に即して眞なり、眞に即して俗なり（即俗而眞、即眞而俗）。故に眞諦の一一の法に異らず、皆な不生不滅なるを以

ての故に。故に亦、能生能滅なり。能生滅を以ての故に、故に円と名づく。文に不可思議と云うは、正しく斯の義なり。若し生定んで是れ生、滅定んで滅ならば、小乗の法のみ。今、大乘の不可思議というは、生に即して能滅す。滅に即して能生す。生滅機に随つて一を定めず。故に声聞の二諦に同じからず。

唐決の始終その心深妙なるか。円教の俗諦とは、無生滅即生滅なり。故に生定んで生に非ず、滅定んで滅に非ず。是れを不思議の二諦と稱するなり。俗諦不生滅の義、その心まことに分明なり。前唐院の大師、「雖似生似滅不實生實滅者。生不可滅・滅不可生」(生に似、滅に似ると云えども、実生実滅にあらずとは、生は滅すべからず、滅は生ずべからず)と云へる、両師の釈義、誠に海を隔てて一なるものか。維燭の決、文書省略せりと云えども、大旨背くところなきか。

これも要を取つて云わば、円教の法性は眞であり、無明十二因縁は俗である。共に円教の眞俗を明かして体円にして差別なし、に尽きる。すべて眞諦からの不生不滅をいうに外ならぬ。すなわち円教の俗諦とは、無生滅即生滅の意であり、やはりその通底に不思議二諦が措定される。これを顯教の範圍で取扱うところに唐決をめぐる諸問題が提起されるのである。ところが、天台実相論の延長線上に、いわゆる縁起を措定した時、それは縁起解釈の限界として当然若起される問題でもある。

『正法眼蔵聞書抄』における『眼蔵』理解について(山内)

る。

従つて、天台実相論の範圍の縁起解釈として、円教二諦からの縁起常住を説くは、ごく自然の成り行きで、論理の展開に無理はない。このような意味の縁起常住、俗諦常住ならば、台家の教相の範圍内においては充分納得のゆくところのものである。この点、『廬談』まで時代が降りると、流石に論点は整理され、表詮にも激みは見られない。可能なかぎり文献主義に遵う姿勢を見せており、口伝法門にまま見うけられる不確かな、アイマイさがない。このような眞摯な『法華三大部』の研究が、地道に一方において行われていたことを、やはりわれわれは確認しておく必要がある。このような研究は、一朝一夕に成るものではない。世上いわれる如き口伝法門とは裏腹に、かかる正統的研究が不断に続行されていたと見るべきで、その意味からも本覚法門を取扱う以上は、『廬談』は、ひとたびは尋究しておく必要がある如くである。天台での恩師山口光円師が、最晩年に至つて『廬談』の重要性を、しきりに口にされたことが今さらのように想い起される。このことを言わんとしていたのが、今にして知られるのである。

一次ニ至、俗諦不生不滅ノ正道理ニ。所立ノ趣ノ前共ニ顯レ畢ス。
此上ニ更ニ無レ所著。但前唐院ノ大師設ニケタマヘリ一箇ノ決。即御

尋中^ニ所來^ス也。此^レ決^{シテ}始終文盡義盡^ス。彼^レ御釋^ノ句句就^ニ難勢^ノ粗所^ニ前出^ス申^ス也。今現見一切法。實生實滅。云何不生滅^ノ問^ヲ。問者重重^ニ難取^ニ要^ヲ只在^ニ此一句^ノ者歟。答^{スル}之^ヲ。今隨聖人佛知見者^ノ。先^ニ斤^ニ問難^ノ心^ノ也。問^ノ心妄情^ノ所見^ヲ為^{シテ}本^ニ實生實滅^ノ義^ヲ疑^フ也。而今所^レ舉^ル俗諦常住^ノ者所^ニ本付^ニ佛知佛見^ノ内証^ニ也。何^ノ舉^ニ妄想顛倒^ノ見^ヲ佛知佛見^ノ俗諦^ヲ可^レ疑耶。其^レ佛知佛見^ノ俗諦^ヲ釋^ス。雖似生似滅矣終日^ニ雖^ニ緣起^ノスト終日^ニ常住^也。廣修^ノ所^レ決^{スル}文云。不可思議正此義也矣誠^ニ可^レ仰信^ス者歟。若實生實滅者。生不可滅。滅不可生矣凡夫^ノ所見^ハ。生^ハ但生^ニ永非^ニ滅^ニ。若爾^ハ生法何^レ可^レ趣^ニ滅^ニ耶。滅^ハ又定滅也。滅處^ニ何^レ可^レ論^ニ生^ニ耶。現見^ノ諸法^ノ中^ニ生^ノ法^ノ者。必^ニ於^ニ滅處^ニ論^ニ此^ノ生^ノ也。滅還非滅^ニ云事現量猶分明^ニ歟。唐決中^ニ。若生定是生^ノ滅定是滅者。小乘法耳。即此心也。又覺大師^ノ次御釋云。生滅者權教^ノ之見。亦凡夫見矣實生實滅^ノ義^ハ凡夫^ノ妄見及權^ノ所見耳。以^レ文不^レ可^レ難^ニ円教^ノ俗諦^ヲ。其義決定^ニ畢^ス。重問^ノ之^ヲ。二俱為^ニ不生滅^ノ者。以^レ何分^ニ二諦^ノ耶矣御精^ノ所^レ來^ル一箇條即^ニ當^ニ今此問^ノ。答^ス之^ヲ。以^レ性眞實性差別^ノ分^ニ二諦^ノ別。故地持明^ニ二法性^ノ。一法法性性差別故。二實法性性眞實故。即二諦之異名也。隨緣不變^ノ准^ニ之可^レ知^ニ之。俗諦常住者。一法法性性差別故意也。眞諦^ノ常住者。二實法性性眞實故義也。但^ニ猶二種^ノ常住^ノ相貌難^ニ明^ニ歟。然而隨緣不變^ノ准^ニ之可^レ知^ニ之。以^レ之常住^ノ義^ヲ可^レ詳^ス之。山家大師。眞如^ノ有^ニ兩重^ノ義^ノ。不變眞如凝然常住。隨緣眞如相續常住矣是即二諦^ノ常住^ノ相^ノ分別^ノ文也。所謂眞諦常住^ノ者凝然常義也。如^ニ虛空^ノ湛然^ノナルカ。俗諦常住^ノ者相續常義也。於^ニ大虛^ノ中^ニ如^ニ四時運轉^ノスル。仍^ニ以^レ隨緣不變^ノ示^ス二諦^ノ常住^ノ。師資御釋共^ニ指^ニ掌^ノ者歟。重^ニ問^ノ之^ヲ。以^レ何得^レ知^ニ不生不滅^ノ矣令^レ徵^ニ俗諦不生不滅^ノ正道理^ヲ御精^ノ趣^ニ自叶^ニ此問^ノ。大師答^ス之^ヲ時。答。有二

門。一者道理故。何者。法性不可生滅故矣隨緣不變^ノ者二種^ノ法性也。不變眞如^ノ外論^ニ隨緣眞如^ノ。隨緣眞如^ノ者。眞如法性^ノ別名也。若爾^ハ共^ニ是法性也。寧^ニ可^レ生滅^ニ耶。道理斯^ニ究盡^ニ畢^ス。再^ニ不^レ可^レ招^ニ御難^ノ者歟。二者依^ニ聖教^ノ。法華云^ニ世間相常住^ノ是十八會第十六難^ノ。

次に、俗諦不生滅の正しき道理に至っては、所立の趣、前共に頭われ畢んぬ。此の上に更に蓄えるところなし。但し前唐院の大師、一箇の決を設けたまへり。即ち御尋ねの中に来るところなり。此の決の始終、文尽き義尽せり。彼の御釈の句句、難勢に就ては粗前^ニに出で申すところなり。今、現見の一切法は、実生実滅なり。云何が不生滅と問せり。問者重^ニの難^ノ、要を取るに、只此の一句に在るか。これに答するに、今聖人仏知見に随うとは、先ず問難の心を斥^ハる也。問の心は妄情の所見を本と為^ナして、実生実滅の義を疑^ハなり。而るを今挙げるところの俗諦常住とは、本^ニ、仏知見の内証に付すところなり。何んぞ妄想顛倒の見を挙げて、仏知見の俗諦を疑うべけんや。其の仏知仏見の俗諦を釈として、「雖似生似滅」と。終日に縁起すと云えども、終日に常住なり。

廣修の決するところの文に云く、不可思議とは正しく此の義なり。誠に仰信すべきか。若し実生実滅ならば、生、滅すべからず、滅、生ずべからず。凡夫の所見は、生は但^タだ生に

して永く滅に非ず。若し爾らば、生法何んぞ滅に趣くべけんや。滅はまた定んで滅なり。滅の処に何んぞ生を論すべけんや。現見の諸法の中に生の法とは、必ず滅の処に於て、此の生を論ずるなり。滅還つて滅に非ずと云う事、現量なお分明なるか。唐決中に、若し生定んで是れ生、滅定んで是れ滅ならば、小乗の法のみ。即ち此の心なり。

また覺大師の次の御釈に云く、生滅（法全四、九四下）とは權教の見なり。また凡夫の見なり。実生実滅の義は凡夫の妄見、および權人の所見のみ。これを以て、円教の俗諦を難すべからず。其の義決定し畢んぬ。重ねてこれを問うとして、二俱（前同）に不生滅と為せば、何を以てか二諦を分たんとやと。御精（おしぎ）に来る所の一箇條すなわち今此の問端に当れり。これが答として、性眞実・性差別を以て、二諦の別を分つ。故に『地持』に二法性を明かす。一には事法性・性差別の故に。二には実法性・性眞実の故に。即ち二諦の異名なり。隨縁不變、これに准じて、これを知るべし。俗諦常住とは、一事法性・性差別故の意なり。眞諦の常住とは、二実法性・性眞実故の義なり。但しなお二種の常住の相貌（あきり）明め難きか。然れば隨縁不變は、これに准じて知んぬべし。これを以て常住の義を詳かにすべきなり。

山家の大師。眞如に兩種の義あり。不變眞如、凝然常住。隨縁眞如、相續常住。是れ即ち二諦の常住の相を分別する文なり。所謂、眞諦常住とは、凝然常の義なり、虚空の湛然な

『正法眼藏聞書抄』における『眼藏』理解について（山内）

るが如し。俗諦常住とは相續常の義なり。大虚の中に於て、四時運轉するが如し。仍つて隨縁不變を以て、二諦の常住を示す。師資の御釈共に掌を指すか。重ねてこれを問うとして、何を以て不生不滅を知ることを得んと。俗諦不生不滅の正しき道理を徴せ令めたまう。御精（おしぎ）の趣き自から此の間に叶へり。大師これを答えたまう時、答う、二門あり。一には道理の故に、何んとなれば、法性は不可生滅の故に。隨縁不變とは二種の法性なり。不變眞如の外に隨縁眞如を論ず。隨縁眞如とは、眞如法性の別名なり。若し爾らば、共に是れ法性なり。寧んぞ生滅すべきや。道理斯（こと）に究尽し畢んぬ。再び御難を招くべからざるものか。二には聖教に依る。『法華』に「世間相常住と云うが故に、また本来寂滅相の故に。」、両文の料簡（きぎん）前に頭わし畢んぬ。文理共に分明なるものか。（是十八第十六難を会す）ほとんど新しい立論は見られない。今いうところの俗諦常住とは、もと仏知仏見の内証に付している。凡夫の妄情を以て見るべからず、と云うにつきる。いまさら眞諦を不變眞如に、俗諦常住を隨縁眞如にかけて、二諦常住の義を解説する必要は、もはやない。

一 至^二常住ノ相貌^一ニ其義幽玄也。誠^レ情識ノ非^レ所^レ測^ル。但^レ外道ノ常見^ト者。不^レ辨^二因縁ノ生滅^一ヲ亂^レ起^ス常^一ノ見^ヲ。故^レ為^二初教^一ノ被^レ破^セ畢^ス。今所^レ云常住^ト者。百非洞^ニ遣^フ四句皆亡^ハ。於^二此^一ノ絶

待不思議、妙理^ニ正^ニ辨^ニ眞俗二諦ノ常住^ニ。隨緣不變ノ二種ノ常住是也。波水譬可思之。同^レ以^レ眞性^ニ爲^レ波。故皆以^レ如爲^レ相矣。濕性悉波^ル、俗諦常住ノ相也。同^レ以^レ波爲^レ濕性^ト。故皆以^レ如爲^レ位矣。不變眞如ノ常住ノ相也。其心^ヲ自炳然也。
是十九會第十七并第十九難（）

常住の相貌に至つては、其の義幽玄なり。誠に情識の測るところに非ず。但し外道の常見とは、因縁の生滅を辨^わへず、^{みだり}乱に常一の見を起す故に、初教の爲めに破せられ畢んぬ。今云うところの常住とは、百非洞に遣り、四句皆な亡ず。此の絶待不思議の妙理に於て、正しく眞俗二諦の常住を辨う。隨緣不變の二種の常住は是れなり。波水の譬これを使うべし。「同じく湿性を以て波と爲す。故に皆な如を以て相と爲す。」（天文二、九八三下）湿性悉く波なるは俗諦常住の相なり。「同じく波を以て湿性と爲すと、故に如を以て位と爲す。」（同前）不變眞如の常住の相なり。其の心おのずから炳然なり。

是十九會第十七并第十九難を会す

これは常住の相貌に就て触れたものの、内容的には、文献も道理も、すべて出尽した観があり、新たに加上すべきものは何もない。

一 山家大師教ニ誠ニシテ前唐院ノ大師ノ事。皆是唯佛ノ境界ナルヘシ。殆難^レ及^ニ論場ノ分別ニ歟。但隨緣不變ノ兩種ノ眞如ハ非ニ三教ノ

所^ニ測^ル。久遠實成。開權顯實。偏^ニ是存^ニ兩種ノ眞如ノ源^ニ也。弘^ニ通圓教^ノ利^ニ益^ニ有^ニ情^ニ云事。偏^ニ可^レ在^ニ俗諦常住ノ法門^ニ也。覺大師受^ニ此ノ御教誠^ノ設^ニ俗諦不生滅決^ノ。句句ノ中ニ顯^ニ精要^ニ。窮^ニ諸佛內證ノ極^ニ盡^ニ一切皆成源^ノ者歟。指^ニ授^ニ止觀文義ノ骨髓^ノ者。所立ノ始終綿綿^ト所住^ニ此ノ御釋^ニ也。所謂^ニ不思議境^ノ者。即是俗諦常住ノ義也。只心^ニ一切法^ニ。一切法^ニ是心^ニ。俗諦常住ノ法門源依^ニ此說^ニ也。又。第一義中ニ法^ニ不可得^ニ。況^ニ三千法^ニ矣。眞諦ノ不生滅文正^ニ在^ニ斯^ニ。世諦^ニ一心^ニ尚具^ニ無量法^ニ。況^ニ三千^ニ耶。矣。俗諦常住ノ法門非^ニ指^ニ掌^ニ耶。止觀ノ文義ノ骨髓^ニ云。寧^ニ可^レ過^ニ之^ニ耶。令^ニ領^ニ知^ニ秘要經論ノ法藏^ノ者。俗諦常住ノ法門^ニ只^ニ不限^ニ第七圓ノ二諦^ニ。始自^ニ生滅ノ二諦^ニ終^ニ至^ニ不思議ノ二諦^ニ。悉^ニ是俗諦常住ノ義也。一代ノ始終悉^ニ俗諦常住ノ義^ニ故。領知秘要經論ノ法藏^ニ云。心在^ニ斯^ニ也。一代ノ始終併^ニ是^ニ不思議ノ二諦^ニ。取意存略ノ二諦ノ名^ニ也。但點^ニ法性^ニ爲^ニ眞諦^ニ。無明十二因縁爲^ニ俗諦^ニ。於^ニ義即足^ニ矣。跨節ノ二諦^ニ者是也。一代ノ束屬^ニ不思議ノ二諦^ニ。即是經論法藏ノ領知^ニ也。其義誠^ニ深妙^ニ者歟。是^ニ會第十八難^ニ（）
此一段ハ於^ニ論場^ニ不可^レ發^ニ言^ニ之^ニ。可^レ云^ニ秘中之秘^ニ也。

山家大師、前唐院の大師を教誡したまう事、皆な是れ唯仏の境界なるべし。殆んど論場の分別に及び難きか。但し隨緣不變の兩種の眞如は、三教の測るところに非ず。久遠實成、開權顯實、偏に是れ兩種の眞如の源に存するなり。円教を弘通し、有情を利益すと云う事、偏に俗諦常住の法門に在るべきなり。覺大師、此の御教誡を受けて、俗諦不生滅の決を設けたまへり。句句の中に精要を顯わす。諸仏内証の極を窮

め、一切皆成の源を尽すものか。止観文義の骨髓を指授すとは、所立の始終綿綿として、此の御釈に住するところなり。

所謂、不思議境とは、即ち是れ俗諦常住の義なり。只心は一切法、一切法は心なり。俗諦常住の法門、源、此の説に依るなり。また、第一義の中に一法すら不可得、況三千の法をや。眞諦の不生不滅の文正しく斯に在り。世諦には一心に尚無量の法を具す。況や三千をや。俗諦常住の法門、常を指すに非ずや。止観文義の骨髓と云へる、寧んぞこれを過ぐるべけんや。秘要經論の法藏を領知せしむとは、俗諦常住の法門は、只第七の円の二諦に限らず。始め生滅の二諦より、終り不思議の二諦に至るまで、悉く是れ俗諦常住の義なり。一代の始終悉く俗諦常住の義なるが故に。領知秘要經論法藏と云へる心、斯に在るなり。一代の始終併ら是れ不思議の二諦なるを取意存略の二諦と名づくるなり。但し法性を點して眞諦を爲し、無明十二因縁を俗諦と爲す。義に於て即ち足る。跨節の二諦とは是れなり。一代を束ねて不思議の二諦に屬す。即ち是れ經論法藏を領知するなり。其の義誠に深妙なるものか。是二十
第十八難を會す

此の一段は論場に於て、これを發言すべからず。秘中の秘と云うべきなり。

ここまで来ると、円教の俗諦常住の説は、山家大師と前唐院大師だけの唯仏与仏の境界となり、論場の分別には及び難

『正法眼藏聞書抄』における『眼藏』理解について（山内）

しと、半ば論理は止揚されたかたちとはなる。それは円教のみの世界であり、前三教の測るところにあらずとして、不変・隨縁兩種の眞如が明かされる。所詮は、慈覺大師の俗諦不生滅の決にベースがあるわけで、それは諸仏内証の極を窮め、止観文義の骨髓を頭わすもの、すべてこの御釈に懸っている。俗諦常住の源、源底とされている。

いうなれば慈覺大師の俗諦不生滅の決こそ、俗諦常住説の根源なのであり、それは只に第七の円の二諦に限らず、始め生滅の二諦から、終り不思議の二諦まで、つまり仏一代の始終が、すべてこれ俗諦常住の義とはなる。ここまで拡大解釈に至るのは、当然の成り行きで、そこに違和感はない。と同時にそれは、初門の者には、大きな誤解を生むおそれあるは充分で、従つて論場において乱りに發言すべからず、秘中の秘となすべし、という意味も理解される。単なる秘儀を弄んだとは思えない。

一 貞觀五年ノ法華會ノ時キ一類ノ執者起ニテ誦論ヲ。諸衆不ニ敢テ判定^一。大衆俱ニ參^ニ前唐院。即決^一。即身成佛ノ義ヲ。常濟等已ニ知^ニ此旨^一。何故^一不ニ即身成佛^ニ等問^一。大師答^ニ此問^一。只聞^ニ此名^一。即是作佛^一。皆不^レ捨身。即身得^ニ成佛^一。何云^ニ不作^一。又重^ニ問云^一。若此身已作佛者。何用^ニ後^一位^一。答^ニ之^一。六即之興^一。尤^ニ由^ニ於此^一。當言^ニ只聞^ニ名字^一。名字。毘盧遮那。若修^ニ修得^一。觀行毘盧遮那。若稱^ニ相似^一。相似。毘盧遮那。若

至^二分眞^一分眞毘盧遮那。若至^三究竟^一究竟毘盧遮那^上。至極言^レ之。圓教俗諦不生滅。只此身即法性。捨^レ何取^レ何。此理難^レ解。故用^三教道^一矣大師重重御釋誠^以不可思議也。成佛得道根源偏^ニ在^三此說^一歟。即身成佛^ノ正體。即是俗諦不生滅義也。弘通圓教^ノ利益有情^ト云^ヘ彌可^レ信者歟。所以^ニ俗諦常住^一者。如來內證^ノ極理也。我等正^ニ備^一此^ノ內證^ニ成佛^ノ要可^レ求^レ外^ニ耶^一是^二二十一^一會第二十難^{（一）}

貞觀五年の法華会の時、一類の執者、諍論を起す。諸衆敢て判定せず。大衆俱に（前）唐院に參ず。即ち即身成仏の義を決したまう。常濟等すでに此の旨を知んぬ。何故ぞ即身作仏せざる等、問せり。大師此の問を答えて、只此の名を聞くは、即是作仏なり。皆な身を捨てずして、成仏することを得。何んぞ不作と云わん。また重ねて、問うて云く、若此身作仏とは、何んぞ後の位を用るや。これを答えたもうに、六即の興り尤も此に由る。当にただ名字を聞くは、名字の毘盧遮那。若し修得を修するは、觀行毘盧遮那。若し相似を稱するは、相似毘盧遮那。若し分眞に至るは、分眞毘盧遮那。若し究竟に至るは、究竟毘盧遮那と言ふべし。至極してこれと言へば、圓教の俗諦不生不滅は、只此の身、即法性。何を捨て何を取らん。此の理は解し難し。故に教道を用う。

大師重重的御釈、誠に以て不可思議なり。成仏得道の根源ひとえに此の説に在るか。即身成仏の正体、即ち是れ俗諦不生滅の義なり。弘道円教の利益有情と云へる、彌信すべきも

のか。所以に俗諦常住とは、如來內証の極理なり。我等正しく此の內証に備うる、成仏の要外に求むべけん。^{是二十一會第二十難を会す}如上の、六即の経緯をへて、即身成仏と、俗諦不生滅、即常住の關係が明かされる。俗諦常住が如來の內証の極理であり、我等はこの內証を備えている以上、外に成仏を求める必要は全くないのである。ただ此の身は即法性なれば、何を捨て、何を取らん。捨てるものも取るものも、すべてないのである。一見修証を無みして本覺を先取りしている感がなくもないが、六即を出しているからには、名字即から觀行即へと修行は要るのであり、相似即から分眞即へと修行の階位はすすむのである。修証がすべて無みされて、ひたすら円教の俗諦常住から、安易に即身成仏を云うにあらず。この点なども、從來は隨分と誤解していた如くである。しかし所論は極めてロジカルなところがあり、かかる巧説によって理窟で解りすぎるので、却って修証が無みされる結果を招いたとも思惟される。

六即を、中国天台流にしか一般に理解出来ないわれわれに取って、如上のまことに成熟した本覺法門からの六即成仏に接すると、改めて本覺法門の本質を見直さざるを得ない。と同時に、『聞書』や『抄』の撰者が、『正法眼藏』の初めての注解作業をこころみる時、かかる成熟した六即成仏と『眼藏』の即心成仏との書き分けに、多大の苦心を払ったのは言

を俟たない。従来の洞門宗学は、全くのこの点を見落している。『聞書』や『抄』は、この点からも再評価されるべきである、と云うのが筆者年来の主張であり、それは『聞書抄』の研究の各巻に於て随處で指摘して来た。同時に『眼蔵』の即心成仏を理解し、解説するとき、その理論水準が、かかる中古天台は本覚法門の成熟した六即成仏より下廻つてはならぬ、と云うのが、これまた筆者の主張で、その至当なるは認められて然るべきものと思う。『正法眼蔵』解釈の自由性は、広く認められると云うものの、洞門の立場から宗学として理解するときは、一定の理論水準が要請されるべきであり、あまりに低水準の『眼蔵』解釈の横行は、きびしく批判されねばならぬ。その批判する根拠を提供する一助として、このような中古天台への同時代的な研究が行われていることを御理解頂ければ幸いである。

一 次至^ニ山王院ノ御釋^ミ。法華論ノ中ニ明^ス三平等ノ義^ヲ。其ノ中、第二^ノ者。論云。世間^ニ涅槃^ハ平等^{ナリ}。以^テ多寶如來入^リ於^ニ涅槃^ニ。世間^ニ涅槃^ハ彼此平等無差別^{ナリ}矣^ハ。山王院ノ大師釋^ス此文云。一^ノ者世間^ニ涅槃^ハ平等^{ナリ}。下^ニ明^ス第二^ノ句^ヲ爲^ス二。初^ニ學^ニ法^ヲ。後^ニ釋^ス義^ヲ。生死涅槃非^ニ異^{ナリ}處^{ナリ}。煩惱菩提無^ニ二^ノ。非^ニ離^ニ世間^ニ更有^ニ涅槃^{ナリ}。非^ニ離^ニ涅槃^ニ別有^ニ世間^{ナリ}。經云。諸法實相。本末究竟等。乃至諸法從本來自寂滅相。是法住法位世間相常住。世間^ニ既常^{ナリ}。誰棄^ス世間^ニ更入^ニ涅槃^ニ。故多寶^ハ全身不散。如入^ニ禪定^ニ。表^ス示^ス常住本無^ニ滅沒^ニ。中論云。因緣所生法。我說即是空假中。下經文云。非如非異。不如三界見於三

界。如斯之言。皆明^ス世間涅槃平等義^ヲ。非^ニ唯多寶一文而已^{ナリ}。是^ニ第二十二^ノ會^ニ第二十一^ノ難^{ナリ}。

次に山王院の御釈に至つては、『法華論』の中に、三平等の義を明かす。其の中の第二とは、論に云く、「世間涅槃平等。以^テ多寶如來入^リ於^ニ涅槃^ニ。世間涅槃彼此平等無差別。」（大正藏二六、八下）山王院の大師、此の文を釈して云く、二には世間涅槃平等の下、第二句を明かして二と爲す。初めに法を挙げ、後に義を釈す。生死涅槃、異處に非ず。煩惱菩提、体二なし。世間を離れて更に涅槃有るに非ず。涅槃を離れて別に世間有るに非ず。經に云く、諸法實相本末究竟等。乃至諸法本從^レ來^ニ常^ニに自^ラ寂滅相^ニ、是の法、法位に住して世間の相常住なり。世間既に常なり、誰か世間を棄てて、更に涅槃に入らん。故に多寶は全身を散ぜずして、禪定に入るが如し。常住本滅没なきを表示す。『中論』に云く、因緣所生法、我說即空假中。下の經文に云く、如に非ず異に非ず、不如三界見於三界。斯の如きの言は、皆な世間涅槃平等の義を明かす。唯だ多寶の一文に非らざるのみ。是^ニ第二十二^ノ難^{ナリ}を會^スす（

此釋^ハ輒^レ不^レ可^レ出^ス之^ヲ。俗諦常住ノ法門。山王院ノ大師勘^ス法華處處^ノ文^ヲ。勘^ス申^ス之^ヲ可^レ云^フ也。一^ハ迹門ノ中ニハ方便品諸法實相^ノ文^ヲ。諸法從^レ本來^ニ、是法住法位^ノ文^ヲ。又多寶世尊全身不散^ノ文^ヲ。「示云。多寶、法體本迹二門也。爰以^テ法華論世間涅槃平等^ヲ、

『正法眼藏聞書抄』における『眼藏』理解について（山内）

(1) 釋云、已入涅槃全身不散矣已入涅槃迹門、全身不散本門也」

此の釈、輒くこれを出すべきからず。俗諦常住の法門、山王院の大師、法華処の文を勘えたまへり。これを勘へ申し、云うべきなり。一には迹門の中には、方便品諸法実相の文、諸法従本来、是法住法位の文。また多宝世尊全身不散の文。

〔示して云く、多宝の法体、本迹二門なり。ここを以て法華論の世間涅槃平等を釈して云く、「已入涅槃全身不散矣、已入涅槃迹門、全身不散は本門なり。」

是本迹不二意也。又本門壽量品中、非如非異等文。是等諸文於今經明ニ俗諦常住ヲ明證也。以要言レ之。本迹二經俱俗諦常住ノ證據也。又勸ニ「論記」何ノ文ト可レ尋也。心法華論世間涅槃平等ノ文。中論因緣所生法ノ文是也。一一可レ為ニ奇模ト。今山王院ノ釋義不可レ披露ス之」

是れは本迹不二の意なり。また本門壽量品の中の「非如非異」等の文、是れ等の諸文は今經に於て、俗諦常住を明かす明証なり。要を以て、これを云わば、本迹の二經俱に俗諦常住の証據なり。また『論記』を勘えたまへり。何の文ぞと尋ぬべきなり。心は『法華論』の世間涅槃平等の文。『中論』の因緣所生法の文是れなり。一一に奇模と為すべし。今の山王院の釈義、これを披露すべからず。

七二

以上で、山王院の釈義を畢っている。内容からは目立った資料は見当らない。これで第二十一まで会通したことになる。なお、左の文が続く。

又云。常差別故不即衆生界。常平等故心佛及衆生是三無差別。故名ニ本離衆生界。常差別故流轉五道說ニ衆生。反流盡源說名為佛。佛即如水。衆生如波。波水似異。濕性本同。雖是本同清濁常別。故天台立二種眞如。不變眞如故法界法爾無佛無生。隨緣眞如故心性緣起有凡聖別。不變家之隨緣故云不離。隨緣家之不變故云不即。心生滅故本來不即。心眞如故本來相即。苦集異故本來不即道滅異故本來常即。涅槃即生死故為不即。生死即涅槃故為不離。○妙故不離。法故不即。法是十界。十界十如權実之法。故為不即。此法本妙無有變異。故名為妙。蓮故不離。華故不即。即離有差別不思議一故矣此御釋尤甚深也。可レ留意也。不變眞如故法界法爾無佛無生矣不變眞如前ニ愍而不見佛不見衆生。隨緣眞如故心性緣起有凡聖別者。隨緣眞如故不思議心性眞緣起也。緣起有凡聖別。不變家之隨緣故云不離者上ノ句。隨隨眞如故心性緣起有凡聖別云故。緣起眞如體ハ不即ト可レ云有。次句ニ釋ル。不變家之隨緣故不離者。隨緣不變源一性ヲ顯ス也。隨緣ト者本不變家ノ隨緣也。不變時無佛無生ト云ヘハトテ。盲者非レ如ニ見ニ日月。即ニ生佛ニ無佛無上ト云也。去レハ此無佛無生體ハ故可レ顯ニ生佛ニ不變家ノ隨緣ト被レ云也サテ無佛無生抑亦生亦佛體アレハ。生ト云法界ノ生也。佛ト云法界ノ佛也。故前句ニ心性緣起有凡聖別トヒツル凡聖體ヲ。下ノ句ニ故云不離釋也。隨緣家之不變故云不即者。上ノ句ニ不變眞如無佛無生體ハ故即ト可レ云有。隨緣家ノ不變アル故ニ。於ニ不

變カ中ニ生佛宛然ナルカ故ニ。故云不即、釋也。上下ノ兩句相准ヘテ可
知。如レ此得レ意。隨緣緣起ノ法體事事ニ相隔。不ニ相ヒ隔。一
故ニ成ニ俗諦常住ノ義也。凡ノ不即不離者。打任テ不即時諸法
隔歴シテ止ミ。不離時諸法圓融シテトヲルヘキ也。今ノ釋心ハ不
爾。以レ即顯ニ不即。以ニ不即顯レ即。如此云時キ不二而二法
門能レ被得レ意伏一也。今ノ御釋末。妙故不離。法故不即。法是
十界十如權実之法。故爲ニ不即。此法本妙無有變異。故名爲
妙。蓮故不離。華故不即。即離有差不思議一故矣是即即不即全
一法ナル事顯也。妙ハ歎シ法ヲ妙ハ即法也。妙即三千。三千即法ナリ
矣此意也。所謂法ノ不思議ナル名レ妙。妙ノ絶待ナル稱法ト也。
爾ハ妙ハ名ニ不離。法ハ名ニ不即。是即即離全一法ナル事顯
也。故結釋之。即離有差不思議一故釋成也。如此得レ意。
俗諦森羅ノ諸法一一分別スヘ。所ニ分別一スル各各ニ不ニ相隔
故。被レ云ニ俗諦常住ト也。()

以上畢

貞治二年癸卯四月十日終功畢

同學志玉戸 法印権大僧都顯幸 年五十九

(底本) 叡山文庫眞如藏『盧談』三十七冊の内

(對校本) 叡山文庫雙嚴院藏『盧談』四十冊の内、

外三本(略)

また云く、常差別故即衆生界。常平等故心仏及衆生、是の
三差別なし。故に不離衆生界と名づく。常差別の故に、五道
に流転するを説いて衆生と名づく。反流源を尽すを説いて名
づけて仏と爲す。仏は即ち水の如く、衆生は波の如し。波水
異なるに似て、湿性本同じ。是れ本同じすと云えども、清濁常

『正法眼藏聞書抄』における『眼藏』理解について(山内)

に別なり。故に天台は二種の眞如を立つ。不変眞如の故に法
界法爾にして、仏なく(衆)生なし。隨緣眞如の故に心性縁
起して凡聖の別あり。不変家の隨緣の故に不離と云う。隨緣
家の不変の故に不即と云う。心生滅の故に本来不即なり、心
眞如の故に本来相即なり。苦集異る故に本来不即なり、道滅
同なる故に本来相即なり。涅槃即生死の故に不即と爲す、生
死即涅槃の故に不離と爲す。○妙の故に不離、法の故に不即
なり。法界是れ十界、十界十如權実の法、故に不即と爲す。
此の法本妙にして変異有ることなし、名づけて妙と爲す。蓮
の故に不離、華の故に不即、即離差別有れども不思議一の故
に。此の御釈尤も甚深なり、意を留むべきなり。不変眞如の
故に法界法爾無仏無生なり。不変眞如の前には、惣じて仏を
見ず、衆生を見ず。隨緣眞如故心性縁起有凡聖別とは、隨緣
眞如の故に不思議の心性、鎮に縁起するなり。縁起すれば自
から凡聖の別あるなり。不変家の隨緣故不離とは、上の句
に、隨緣眞如故心性縁起有凡聖別と云うが故に、縁起眞如の
体をば不即と云うべきにて有るを、次句に釈する時、不変家
之隨緣故云不離とは、隨緣不変の源、一性なる事を顯わすな
り。隨緣とは、本不変が家の隨緣なり。不変の時を無仏無生
と云へばとて、盲目の日月を見ざる如には非ず。生仏に即し
て無仏無生なり。去れば此の無仏無生の体は、故さら生仏を
顯わるべきが故に、不変が家の隨緣と云われるなり。さて無

仏無生を抑えて、亦生亦仏の体なれば、生と云うも法界の生なり、仏と云うも法界の仏なり。故に前句に心性縁起有凡聖別と云つる凡聖の体を、下の句には故云不離と釈するなり。

隨緣家之不變故云不即とは、上の句に、不變眞如は無仏無生の体なるが故に、即と云うべきにて有るを、隨緣が家の不變なるが故に。不變が中に於て、生仏宛然なるが故に、故云不即と釈するなり。上下の兩句相准へて知んぬべし。此の如く意得えれば、隨緣縁起の法体、事事相い隔てず、相い隔てざるが故に、俗諦常住の義を成ずるなり。およそ不即不離とは、打任ては不即時は諸法隔歴して止みぬ。不離の時は諸法円融してとるべきなり。今の釈の心は爾らず、即を以て不即を顯わし、不即を以て即を顯わす。此の如く云う時、不二而二の法門は能く意得伏せられるなり。今の御釈の末に、妙の故に不離、法の故に不即。法は是れ十（界）、十界十如權実の法、故に不即と為す。此の法本妙にして變異有ること無し、故に名づけて妙と為す。蓮の故に不離、華の故に不即、即離差有れども不思議一の故にと。是れ即ち即不即全く一法なる事を顯わすなり。妙は法を歎じ、妙は即ち法なり。「妙即三千、三千は即法なり」、この意なり。所謂、法の不思議なるを妙と名づけ、妙の絶対なるを法と稱するなり。爾るを妙をば不離と名づけ、法をば不即と名づく。是れ即ち即離の全く一法なる事を顯わすなり。故にこれを結釈して、即離有

差不思議一故と釈成するなり。此の如く意得れば、俗諦森羅の諸法、一一に分別すれば、分別するところが、各各に相い隔てざるが故に、俗諦常住と云われるなり。

論義には、それなりの論理の流れがあるので、最後まで一括して掲出した。

以下、「一 次至山王院御釈、法華論中明三平等義」（同上、三二八頁上）からの文を解説して見る。それは、『眼藏』理解に是非とも必要な、「不如三界見於三界」に密接に関係しており、この文をいかに本覺法門が解しているかを識ることにより、『眼藏』そのものの理解も、また深味を増す、と思われるので、出来だけ丁寧な吟味をこころみる。

山王院の御釈と云うのは、『法華論』の中に三平等を明かす中、その第二に、「世間涅槃平等。以多宝如来入於涅槃。世間涅槃彼此平等無差別。」（世間と涅槃は平等なり。多宝如来涅槃に入るを以て、世間と涅槃とは彼此平等無差別なり。）（大正藏二六、八下）とあり、この文をいかに解するかによつて、世間と涅槃との平等・無差別を明かさんとする。それは上來論じてきた円の俗諦常住の眞意を、重ねて明かすことに外ならない。

先ず、この文を釈して云うには、二に世間涅槃平等の下、（仏全二五、二一八下〜九上）、第二句を明すに二と為す。初め

は法を挙げ、後に義を釈す。云わんとするところは、生死と涅槃とは異処に非らず、とは煩惱と菩提とは、その体無二と云う意味だ。その体一なりの理を出す。この体無二、体一の理を、経豪の『抄』は特にラフに用いるので、筆者がその処理に閉口しているのは、『聞書抄』研究の随処に見られよう。あまりラフに用いられると、正直云って本覚法門との識別は出来にくい。『抄』の撰者は、識別を意識して使用しているからよいようなものの、その意図さえ見当らぬ現時の『眼蔵』解釈にお目にかかる時、慨嘆を禁じ得ない。

それはそれとして、「世間を離れて更に涅槃有るに非らず、涅槃を離れて別に世間有るに非らず。」の文がつづく。これが『経』でいう諸法実相・本末究竟等の意味であり、また諸法従本来、常自寂滅相（諸法は本従り来、常に自から寂滅の相なり）、是法住法位世間相常住、の文がつづいて出される。

これを以て見ると、生死涅槃は煩惱菩提と、そして世間涅槃とセットされて、すべてその体無二、体一の理によって説明されているのを見る。その上に両者の相即が説かれて、教証として、諸法従本来常自寂滅相、是法住法位世間相常住の文が出される。これが釈としての流れで、殆んどセオリー化されていると云ってよい。そして『眼蔵』に引用される「是法住法位世間相常住」の文は、中古天台では、このようにセオリー化されて成熟したかたちで使用されているのを、確か

『正法眼蔵聞書抄』における『眼蔵』理解について（山内）

めておく必要がある。この文が「方便品」からの引用であるから迹門である、などとの解釈は、すくなくとも中古では成り立たないのである。曾ての鏡島元隆師と、田村芳朗氏との、この文をめぐる論争を想起されたい。（拙著、『道元禅と天台本覚法門』本論 第三部 第二章参照）

本覚法門では、田村氏の言うが如く、極めて本門的に重用、珍重されているのである。それは見るが如く、『法華論』における「以多宝如来入於涅槃、世間涅槃彼此平等無差別」の文と連動し、それは世間既に常なれば、誰れか世間を棄てて更に涅槃に入らん、と云うことになり、ここに多宝仏の全身不散、如入禅定（全身を散せずして、禅定に入るが如し）が云われることになる。この多宝仏の全身不散、如入禅定と、『眼蔵』の云う如来全身とは、いかなる関係にあるのか、興味の存するところで、にわかに短絡することは出来ぬが、如来全身を教へと連関せしめる時、有力な手掛りとなるのは否定できないところ、誰かこころみてはと思う。

いずれにしても、多宝仏の全身不散、如入禅定は、常住にして本来、滅没無きを表示しているのであり、そのままなんの抵抗もなく円の二諦義は眞諦常住の中に吞込まれてしまう。これを『中論』の因縁所生法・我說即是空ならぬ空仮中の三諦へと繋ぎ、さらに下の『経』の非如非異へとつないでゆく。

かくして出された不如三界見於三界は、斯のような言は、みな世間涅槃平等の義を明かしているに外ならぬ。その経証は、唯だ多宝仏の全身不散・如入禪定の一文に止まらぬ。『中論』の因縁所生法しかり、『法華経』の世間相常住しかり、非如非異しかり、とたみかける。

すると、不如三界見於三界の文は、すくなくとも『盧談』二諦義においては、如上の世間涅槃平等の義の範囲で理會すべきものと思う。これ以上でもなければ、以下でもない。本覚法門における解釈を、確かと抑えておくべきは云うまでもない。その上で、『聞書』および『抄』における同文解釈と比擬し、両者の異同を論ずべきものと思う。この手続きを経ない不如三界云の解説は、客観性のない所詮は独りよがりすぎない。

しかし、この山王院の御釈は、たやすくこれを出しては不可ない。と流石に本覚法門も、クギを刺すことを忘れない。ストレートの俗諦常住が成立することを懼れたのである。このままだと、それは世間相常住の直接肯定とはなり、凡夫の煩惱さながらに成仏を認めることになってしまう。「此の釈、輒く之を出す可からず」と云う眞意を理解すべきである。

かくして、ここで山王院の大師が明かす俗諦常住の法門は、円の二諦義の上の俗諦常住なるが故に、『法華経』の処の文を勘えて、これを慎重に釈し出されたのである。すな

わち一つは迹門の中では「方便品」の諸法実相の文、ないし諸法従本来・是法住法位の文を引き、あるいは「宝塔品」の多宝世尊全身不散の文を引く。

すると、ここで多宝の法体についての本迹が論じられることになる。「示会」からがそれで、論義と云うものは、この点どこまでも教相のワクに副って論理的になされる。ここを以て『法華論』における世間涅槃平等の義を釈して、已入涅槃全身不散と云う。已入涅槃は迹門（傍注に開迹）、全身不散は本門（傍注に顕本）と云うことになり、多宝の法体の本迹二門が、開迹顕本として明かされたことになる。開迹顕本に至れば、次に本迹不二が説かれるのは必然で、逆に云えば、本迹不二門の上にかかる世間涅槃平等無差別が説かれている、と云ってもよく、それだけに、安易に世間と涅槃との体無二を出すことを戒められたのである。

そこで出された本迹不二の意であるが、また本門の「寿量品」の中の非如非異等の諸文は、今経すなわち『法華経』における俗諦常住を明かすところの明証に外ならぬ。要を以てこれを言えば、本迹の二経は俱に、ここで云う俗諦常住の証拠とはなり得るものである。

そこでまた『論記』を勘えられて、いずれの文ぞと尋ねられ、心は、『法華論』の世間平等等の文は、『中論』の因縁所生法に外ならぬとなす。これが『論』からの明証とはなる。

このようにひとつ一つが奇（規カ）模とはなるべきもの。
従って今の山王院の釈義は、たやすくこれを披露してはならない。

以上で、世間涅槃の平等の義が、いちおう片付いたので、次に常差別・常平等の義が明からされる。いま文を出せば「又云、常差別故不即衆生界、常平等故心仏及衆生是三無差別」（又云く、常差別の故に不即衆生界なり、常平等の故に心仏及衆生是三無差別なり。）かくして、不離衆生界とは云われるのである。常差別の故に、五道に流転するのであり、衆生とは名づけられる。反流して源を尽くし、名を説いて仏と為す。仏は即ち水の如く、衆生は波の如し。波と水とは異なるに似たれども、湿性は本同じ。これ本同と雖も、清濁常に別なり。このように衆生と仏との同異を、波と水に喩え、その本同を湿性を以てする説明方法は、本覚法門の代表的各書に周ねく見られるところ、累説の要はない。そして、かかる理の一元的立場から常差別と常平等を説くと、それは非如非異以上にその注釈はすまないことが解つて興味ふかい。ある意味では、実相論の持つ限界を示していると云える。

従つて、かかる立場から、さらに縁起の説明に移るのが、次の文で、それは日本天台独自のものと云つても過言ではなく、同時にそれは、上来言う如く実相論の立場からの縁起解釈を示す限界とも見られる。おそらく華嚴や法相から見れば

論難の対象とされ、またそれ故にこそ南都との論争が、この点についても歴史的に展開されたのであらうが今は触れない。

ひたすら今は天台所立の二種の眞如について、そこに説かれる不変眞如と隨縁眞如との關係を究明して見よう。

先ず、不変眞如は法界法爾であるから、そこに仏もなく衆生もない。生仏無二の境地である。これに対して隨縁眞如の故に、そこに心性の縁起があり、凡聖の別があることになる。不変家の隨縁であれば不離と云い、隨縁家の不変であれば不即と云う。これが不離不即の意であつて見れば、心生滅の故に本来不即、心眞如の故に本来相即、とはなる。

これを四諦に懸けて云えば、苦集は異の故に本来不即、道滅は異（同か）の故に本来常即となる。道滅は同でなければ理窟に合わぬ。本来不即・本来相即と云うのが曲者で、そこに本覚法門特有の理常住の一元論が、強力に作用しているのを識らねばならぬ。いかにも不変眞如と隨縁眞如とは、不変家と隨縁家の立場から、その不即不離が論理的斉合性を保つてパラレルに表詮されているが、それは表面だけのはなしで、内容的には眞如常住の上に不変眞如を主体に明かされているのは、誰の目にも明らかであらう。

これは四諦にかけ、さらに涅槃即生死にかけても変らない。涅槃即生死故為不即、生死即涅槃故為不離（涅槃即生死

の故に不即と為す、生死即涅槃の故に不離と為す」と云うのがそれである。

かくしてそれは、妙故不離、法界不即と、十界に懸けられてゆく。法は十界、十界十如樞実之法、故為不即（法は是十界、十界十如樞実の法、故に不即と為す）。此法本妙無有_レ三變異、故名為_レ妙（此の法は本妙にして變異有ること無し、故に名づけて妙と為す）、これは不離を云いしもの。かかる不即と不離の關係は、蓮故不離・華故不即（蓮の故に不離・華の故に不即）と、その即・離は差別有れども不思議一故と、不思議一の中に摂められる。不思議一については再説しない。つまりは眞如の不変・隨縁も、不思議一に落居するのを識ればよい。

しかるに、此御釈尤甚深也、可留意也（此の御釈尤も甚深なり、意を留むすぎなり）と、その重要性を指摘して、説きすめる。これはそれだけ不変・隨縁の眞如の意味するところを重大視すると共に、如上の解説ではいまだ不充分と見てのことであろう。

先に出す如く、不変眞如の故に法界法爾、仏無く衆生無し、と云うが、不変眞如の前には惣じて仏を見ず、衆生を見ず。また隨縁眞如の故に心性縁起して凡聖の別有りとは云うが、隨縁眞如の故に不思議の心性が鎮に縁起するのであって、縁起すれば自から凡聖の別有るは当然のことである。こ

こまでの釈によどみはない。

しかし、ここからの説明は容易なことではないが、論理のスジを通すは次に見る如くである。不変家の隨縁の故に不離と云うのは、隨縁眞如の故に心性縁起して凡聖の別ありと云うからであって、縁起眞如の体をば不即と云うべきにてあるを、次句に釈する時は、不変家の隨縁の故に不離と云うのは、隨縁不変の源は一性なることを顯わさんがためである。なんのことはない、隨縁不縁の根源を一性に顯らかに帰せしめている。

すると、隨縁とは本不変が家の隨縁と云うことになり、すべては本来不変の眞如に帰するのである。問題は、その不変眞如の説明であるが、それは不変のときは、無仏無生、仏も無く衆生も無いと云うけれども、盲者の日月を見ざる如くには非らず、全く仏と衆生が見えないわけではない。仏と衆生とに即して、無仏無生とは云うのである。従って此の無仏無生の体は、故さら衆生と仏とを顯わすのであるから、不変が家の隨縁とは云われるのである。

これで大分、隨縁眞如の内容が解ってきた。あとは生仏に即して無仏無生と云うことが解ればよい。次の「サテ無仏無生ヲ抑ヘテ」以下の文が、これに応えてくれる。さて故さらに生仏を顯わされる無仏無仏の体は、また亦生亦仏の体とも表詮される。これは無生無仏の肯定的表現に外ならぬ。従っ

てそれは、生と云うも法界のなり、仏と云うも法界の仏なり、と云うことになり、前句に心性縁起有凡聖別と云うところの凡聖の体を、下の句では、故云不離とは積されたのである。

隨緣家之不變故云不即とは、上の句に不變眞如は無仏無生の体なるが故に、即と云うべきにて有るを、隨緣が家の不變なるが故に、不變が中に於て生仏宛然なるが故に、故云不即と積するのである。

以上で、故云不離と、故云不即の意が、おおむね明されたことになる。そこで上下の兩句、相准なぞらえて知る可し、と念を押す。このように心得えれば、隨緣起の法体、事に相い隔てず、相い隔てざるが故に、俗諦常住の義を成ずるとなす。要を以て云わば、隨緣と云うもそれは不變が家の隨緣に外ならず、隨緣の家の不變なれば、不離とも不即とも、それは表現し得る。この微妙な消息を論理的に尅実しようとしたのが、如上の文である。おおむね成功したと見たのであろう、このように心得るならば、隨緣緣起の法体は、事に相い隔てず俗諦常住を成ずる、と云っている。

これでもまだ隨緣緣起の説明は不充分と見たのである。キーワードの不離不即についての追究をさらにこころみる。この点、論義と云われるだけあって、その論理的尅実はまさに驚異すべきものがある。

『正法眼藏聞書抄』における『眼藏』理解について（山内）

凡そ不即不離とは、担任うちまかせては、一般的に云うと、不即時は諸法隔歴きやくりやくして止ぬ。諸法が隔歴のままとなっている。不離の時は、諸法円融してとおるべきなり。すなわち諸法の隔歴と円融とが、ハッキリしている。

今の釈のころは、爾しからず。ここで云う説明は違う。即を以て不即を顯わし、不即を以て即を顯わす。このように云う時、不二而二の法門はよく会得されるのである。今の御釈の末に、妙故不離・法故不即、法是十界、十界十如權実之法、故為不即。此法本妙無有變異、故名為妙。蓮故不離、華故不即、即離有差不思議一故。（前出）と云っているのは、これすなわち即と不即との全く一法なることを顯わしているのである。突き詰めれば、妙は法を歎じ、妙はそのまま即法に外ならぬ。妙即三千、三千は即法であるとは、この意である。いわゆる法の不思議なるを妙と名づけ、妙の絶待なるを法と稱するのである。

爾しからば、妙をば不離と名づけ、法をば不即と名づけ、これすなわち即・離が全く一法なることを顯わすのである。そこで如上を結集して、即離有差不思議一故（即離差有れども不思議一の故に）と、釈成されたのである。

以上で、本書における不即不離の意は、説き尽くされた。即・離の差別はあるが、不思議一に落居するのである。このように心得えて、俗諦における森羅の、ありとあらゆる諸法

を、ひとつ一つ分別すれば、分別するところがそれぞれ相い隔つことがないから、俗諦常住とは云われるのである。隨縁縁起とは、かかる俗諦常住を云うに外ならぬ。打任せて、即離を二諦相對して説くは別教の云うところ、円教の二諦において即離は不思議一に摂せられて、全く一法とはなり、かかる一法の上からの俗諦常住なることを理會せねばならぬ。

『正法眼藏』に初めて注を施した『聞書』や『抄』の撰者たちが、このような天台側の俗諦常住に接した時、宗意における現実把握との異同を、どのように弁別し且つ書き分けたか、興味の存するところである。

拙著『正法眼藏聞書抄の研究』の各巻を通して、如上の視点からの追究を、それなりにこころみて来たが、なんと云っても本覚法門の理解が未熟であったため、思うような成果が見られなかったのは見るが如くである。

しかし、本覚法門も『廬談』聞書に及んで見ると、いささか深入りした感がないでもない。本書の巻末の奥書には、貞治二年（一二三三）癸卯四月十日終功畢とあり、十四世紀後半の成立なるを思わせる。従って、経豪の『抄』成立（一三〇八）からは半世紀ほど降るわけで、比擬するに難点があるのは、当初に述べたとおりである。が、たとえ俗諦常住ひとつを採っても、その本覚法門における完成度はまことに高いものがある。多少時代は降ると云うものの、口伝成立から成

文化の間を二、三〇年と指定すれば、経豪の『抄』成立時と、それほど離れたものとは思われない。経豪『抄』理解の一助になればと、とうとう『廬談』まで踏込んでしまったが、これには、もうひとつのわけがある。

天台での恩師山口光円師も、示寂前の短かいひと時であったが、みずから設けた天台学問所において講じたのが、『廬談』聞書であった。師示寂の歳に近づくにつれ、迂遠な筆者も終に『廬談』聞書に至ったかと思うと感懷なきを得ない。同師から口授された恵心点『法華三大部』を土台に、漸く『摩訶止観と正法眼藏』の第一巻が、平成九年末には刊行の運びとなる。そこでも如上の視点からの論述がなされているのは云うまでもない。

追記。同巻は平成十年（一九九八）刊行されたが、その第二巻も石島尚雄師の原典校正の協力を得て近く発刊の運びとなる。全五巻を予定しているが、それは先のこととなるから、『廬談』聞書等の考察は、これを以て終りとする。あとは池田魯参教授を始め、石島尚雄・佐々木俊道の両師等の後学に託するしかない。